

# 古事記における兄弟

## —皇位互譲について—

川崎 美香

### 1. はじめに—兄弟の語られる関係性—

古事記には、兄弟を語った説話が多くある。これらにおいて描かれている兄弟の関係性というのは、皇位・女性などをめぐる争い・やりとり、またはそれに伴う協力関係、とまとめることができると思われる。

しかしながら、古事記においてこうした兄弟を語った説話では、そのほとんどが争い合う関係として兄弟を描いている。その場合の特徴としては、まず、最終的に勝利するのは、上の子（長男等）ではなく、下の子（特に末子）である場合が多い、ということが挙げられる。つまり、兄弟の争いにおいて弟が勝利し、負けた兄へは制裁が加えられるという形になることが多いのである。次に、勝者である弟は、母、妻の父、兄などの協力を得ているということもいえる。（このように、最終的に弟の勝利となる話形を、末子成功譚という）

さて、古事記における兄弟は、そのほとんどが争い合う関係として描かれていると述べたが、それらとは違い、お互いに譲り合う関係性の兄弟も古事記には存在する。それは、天皇の息子である皇子たちが皇位を譲り合うというものであり、古事記の中では次の二例が見られる。大雀命（オホサザキノミコト／後の仁徳天皇）と宇遲能和紀郎子（ウヂノワキイラツコ）、意禰王（オケノミコ／後の仁賢天皇）と袁禰王（ヲケノミコ／後の顕宗天皇）である。なお、これ以降、表記の簡略化のために大雀命はオホサザキ、宇遲能和紀郎子はワキイラツコ、意禰王はオケ、袁禰王はヲケとする。

今回、争い合う関係で語られることがほとんどである古事記の兄弟において、この譲り合う関係性というのはどういうものなのか、ということに疑問をもち、研究対象とした。したがって、本研究では、皇位互譲を語る二つの説話（オホサザキとワキイラツコ、オケとヲケ）の分析を通して、古事記における皇位互譲とはどのように語られているものか、そして、それを語ることにどのような意味があるか、ということについて考察しようと思う。

なお、引用及び参考として挙げる論文著者名等は敬称略とすることを先に注記しておく。

### 2. 説話の特徴とその分析

まず、今回対象とするそれぞれの説話の物語の概要、日本書紀に載る類同記事との違いを挙げ、皇位互譲の説話に見られる特徴をまとめることとする。なお、今回の研究では、日本書紀等との違いを直接

扱うことはしなかったが、今後の研究においては、これらの要素を考慮に入れることが必要不可欠になると思われるため、記述しておく。

#### 2.1 オホサザキとワキイラツコ

##### 2.1.1 物語の概要

古事記においては、応神記にオホサザキとワキイラツコの関係性に関する記事がみえる。その物語の概要は次の通りである。

①父である応神天皇は、弟であるワキイラツコを後継者に指名した。<sup>2</sup>

②大山守命（オホヤマモリノミコト／オホサザキとワキイラツコの兄）の反乱を、ワキイラツコはオホサザキの協力を得て平定。

③オホサザキとワキイラツコは、皇位をお互いに譲り合う。

④ワキイラツコが亡くなったため、オホサザキが天皇となる。

##### 2.1.2 日本書紀との違い

日本書紀において、これに対応する記事は仁徳即位前紀にみえる。記紀間の記事における違いについては、次の3点が主に挙げられる。

まず、ワキイラツコの死に対する記述に違いがみられる。古事記ではただ「然るに宇遲能和紀郎子は早く崩りましき。」とあるだけで、ワキイラツコの死の経緯については特に記載がない。しかし、日本書紀においては「乃ち自ら死りたまひぬ」<sup>3</sup>とあり、つまり、ワキイラツコの死は自殺であったことが示されている。<sup>4</sup>

次に、日本書紀には古事記にはないワキイラツコの蘇生記事が存在する。これはワキイラツコの死の記事の直後にあるのだが、オホサザキの呼びかけに応え、ワキイラツコが一度蘇生して兄と言葉を交わすというエピソードである。<sup>5</sup>

また、古事記にはない日本書紀の記事として、ワキイラツコが阿直岐・王仁に典籍を学ぶという、彼と儒教との関わりを示すものも存在している。<sup>6</sup>

#### 2.2 オケとヲケ

##### 2.2.1 物語の概要

古事記においては、安康記、清寧記、顕宗記にオケとヲケの兄弟に関する記載が存在する。その物語概要についてまとめると次のようになる。<sup>7</sup>

①大長谷王子（オホハツセノミコ／後の雄略天皇）に父を殺され、オケとヲケは命の危険を避けて逃げる。

②二人で身をやつして不遇な暮らしを長く続けた後、清寧天皇の死後に見出される。（その際の舞・名

乗りの順でも譲り合う)

③オケとヲケは皇位を譲り合う。

④名乗りの功で弟のヲケが天皇になる。

⑤オケ(兄)は、天皇となったヲケ(弟)を戒めたりもする。(父の敵である雄略天皇への復讐に走ろうとした弟を兄が止める)

⑥弟が早くに亡くなったため、兄であるオケが天皇となる。

## 2.2.2 日本書紀との違い<sup>8</sup>

これに対応する記事は、日本書紀では主に顕宗即位前紀にみえる。古事記における記事との違いについては、主に次の3点が挙げられる。

まず、日本書紀にはオケ・ヲケ兄弟の逃亡の際の協力者として、日下部使主と吾田彦の名が示されている。古事記にはこのような記事はなく、これは日本書紀特有のものといえる。

次に、古事記と日本書紀ではオケ・ヲケの見出された時期が異なる。古事記では、清寧天皇の死後となっているが、日本書紀では、清寧天皇二年十二月にその記事がみえ、清寧天皇の生存中である。そして、日本書紀ではオケ・ヲケの二人のうち、清寧天皇がオケを皇太子に指名するという記事が存在している。<sup>9</sup>

## 2.3 二つの説話からみえること

このように、オホサザキとワキイラツコ、オケとヲケの二つの説話をみていくことで、いくつかの共通する特徴を挙げるができるかと思われる。

まず、弟には即位する(即位し得る)事情がある、という点が指摘できる。ワキイラツコの場合は応神天皇(父)の意向によって即位の資格を示され、ヲケの場合は自らの名乗りの功績によって即位に至る。

次に、兄に皇位継承に優先権があるという通念が存在するのではないか、と思われることが挙げられる。これは、ワキイラツコにしてもヲケにしても、即位の事情のある弟たちがそれでもなお、特に即位の事情をもつとまでは言えない兄に皇位を譲ろうとすることから推測される。<sup>10</sup>

また、兄は弟に協力的であることもいえる。オホサザキは大山守命の反乱の際、ワキイラツコに協力している。もともと父である応神天皇に「兄の子と弟の子と孰れか愛しき」と尋ねられたときには、父の意向を汲んで「弟の子は(中略)これぞ愛しき」と応答し、ワキイラツコの皇位継承を認めたことから、ワキイラツコとは敵対関係になかったと推測される。また、オケはヲケに快く皇位を譲り、ヲケの即位後も、それを支えていた節がある。即位後の弟に対して彼の行いを諫めたというエピソードからは、彼が徳の高い兄であると示されているのではないか、とも考えられるように思われる。

そして、弟は早くに亡くなり、その死後、兄は皇位につくということが共通しているといえる。

このように、皇位継承において、年長者が優先される通念が存在するということが、兄が得のある人物

であることを語る記述があることがわかる。一方で、弟は父の意向や自らの功績によって皇位継承の資格を有することが示されている。したがって、皇位互譲説話において、皇位継承のあり方は、基本的には年長者相統であるが、説話的な末子成功譚の要素も混じっているといえる。また、有徳者に皇位継承の資格があるということも示されているのではないかと考えられる。

## 3. 中国文献・儒教思想との関わり

皇位互譲説話に関しては、中国文献や儒教の影響が先行研究でもよく指摘されている。<sup>11</sup>ここでは、そうした中国文献・儒教思想からの影響関係についていくつか例を挙げておこうと思う。

### 3.1 兄弟間で譲り合う

兄弟間で位を譲り合うという話は、中国の文献にもいくつかみられる。例えば、『史記』の「互太伯世家」では、兄である諸樊は賢明な弟季札(四男)に位を譲ろうとするが、弟は兄が嫡子であることを理由に辞退し、後に下野する。また、『史記』の「伯夷列伝」では、伯夷(兄)と叔齊(弟)のうち、父は弟を位につけたいと思っていたが、父の死後、二人はお互いに帝位を譲り合い、結局どちらも帝位につかなかった、という記述がある。これは、今回扱ったオホサザキとワキイラツコの説話と同様、その後の兄弟たちの行動が結果的に父の意向に沿わなかった例といえるだろう。

### 3.2 儒教思想の影響

皇位互譲説話にみられる儒教思想の影響としては、次の3点が考えられる。

まず、長子相統という考え方が儒教には存在する。田所義行『儒家思想から見る古事記の研究』<sup>12</sup>では、「史記周本紀によれば、周王はだいたい長子相統」であるとその例を示している。

次に、悌という思想が挙げられる。これは、「弟は兄に従う」というものであるといえる。例えば、『礼記』の「大学篇」では、「孝は君に事ふる所以なり、弟は長に事ふる所以なり。慈は衆に使ふ所以なり。」<sup>13</sup>という記述が存在することが挙げられる。

そして、禪譲、つまり、徳のある者が帝位を継ぐという考え方の影響が考えられる。田所義行『儒家思想から見る古事記の研究』<sup>14</sup>では、『孟子』の「萬章上篇」において、堯は舜、舜は禹、というように、世襲ではなく有徳者へと帝位を譲る記述があることを挙げ、この思想について説明している。

長子相統、悌(弟は兄に従う)、禪譲(有徳者の即位)というこれらのあり方は、皇位互譲説話の分析にみえた、兄に優先権がある、弟が兄に譲る、有徳者に皇位継承の資格がある、というものに相当すると思われる。

## 4. まとめ—古事記における皇位互譲の意味—

このように、皇位互譲説話についてみてきたが、

ここで、古事記においてそれが語られる意味として次のような3点を考えた。

I, 謙譲・譲るという精神の美德を示すことにより、天皇（皇族）たちが徳の高い人物たちであることを描いている。

II, 皇位継承において、基本的には、年かさの者が優先されることを示す。

III, 皇位継承の語り方として、年長者相続と同時に、それと相反する末子成功譚の要素をもつ形を提示する。

さて、荻原千鶴『古事記』の構想と天皇像<sup>15</sup>では、古事記は皇位継承のあり方をそれとなく示すだけであるとされる。前述したように、皇位互譲説話から読み取れる皇位継承のあり方とは、年長者が優先される、及び、有徳者が即位する、というものであると考えられる。したがって、古事記における皇位互譲説話は、皇位継承のあり方として、年長者優先、有徳者の即位等の要素をそれとなく提示しているものであるといえるのではないだろうか。

## 5. 今後の研究課題

今後の課題としては、主に次の3点が挙げられる。

まず、今回の研究で皇位互譲説話が示すとした皇位継承のあり方に反する説話について考察を行う必要があるといえる。今回、古事記の示す皇位継承のあり方の一端として、年長者・有徳者の優先という要素の存在を指摘したが、古事記においては、皇位継承において年下が優先されているもの、有徳とはいえないような天皇や皇子の姿を語るものも多い。これらについて、今回の論との矛盾点を検討・考察していくことが今後の研究において必要不可欠と思われる。

皇位継承の語り方として年長者相続と末子成功譚の要素を合わせもつ形が提示されているということについて検討していくことも重要である。これについては、今回の研究でその意味を明確に見出すことはできなかった。今後は、古事記の構成の問題も含めて考えていきたいと思う。

また、今回は時間の関係等で扱えなかった、二つの皇位互譲説話の間にある違い、及びそれぞれの説話の記紀間にみえる違いについての考察もしていく必要があると考える。

このような課題を中心に、今後も研究を続け、深めていきたいと思っている。

## 注

1. この話形は、古事記にのみ見られるものではなく、世界中の神話・伝説・昔話等で多く見られるものである。
2. 「大山守命は山海の政せよ。大雀命は食国の政を執りて白したまへ。宇遲和氣郎子は、天津日繼を知らしめせ」（*応神記*）
3. 太子の曰はく、「我、兄王の志を奪ふべからざることを

知れり。豈久しく生きて、天下を煩はさむや」とのたまひて、乃ち自ら死りたまひぬ。（*仁徳即位前紀*）

4. 古事記は『古事記（上）（中）（下）』（次田真幸校注、講談社学術文庫、1977~1984）、日本書紀は『日本書紀（一）～（五）』（坂本太郎他校注、岩波文庫、1994~1995）をテキストとして使用し、以降、引用もこれらからである。
5. 爰に太子、薨りまして三日に経りぬ。時に大鷦鷯尊、標擗ちおらび哭きたまひて、所知知らず。乃ち髪を解き屍に跨りて、三たび呼びて曰はく、「我が弟の皇子」とのたまふ。乃ち応時にして活でたまひぬ。（後略）（*仁徳即位前紀*）
6. 十五年の秋八月の壬戌の朔丁卯に、百済の王、阿直伎を遣して、良馬二匹を貢る。（中略）阿直伎、亦能く経典を読み。即ち太子菟道稚郎子、師としたまふ。十六年の春二月に、王仁来り。則ち太子菟道稚郎子、師としたまふ。諸の典籍を王仁に習ひたまふ。（*応神記*）
7. ①→*安康記*、②③④→*清寧記*、⑤⑥→*顕宗記*。
8. オケとヲケの物語に関しては、播磨風土記美囊郡の記事の中にも、前述 2.2.1 の①②に当たる部分の記事が存在していることを参考までに挙げておく。
9. 夏四月の乙酉の朔辛卯に、億計王を以て皇太子とす。弘計王を以て皇子とす。（*清寧紀三年*）
10. *清寧記*にみえる「針間の志自牟が家に住みし時、汝命を顕したまはずありせば、更に天の下に臨む君にあらざらまし。これ既に汝命の功なり。かれ、吾は兄にあれども、なほ汝命先づ天の下治らしめせ」というオケの発言からも、本来は兄が継ぐべきとする通念の存在をうかがうことができるように思われる。
11. 菅野雅雄「*「応神記」海人の涙*」（『古事記構造の研究』おうふう、2000.5）など。
12. 田所義行『*儒家思想から見た古事記の研究*』桜楓社、1966.3
13. 『*新釈漢文大系2 大学 中庸*』（赤塚忠校注、明治書院、1978）より引用。
14. 注6 同掲書
15. 荻原千鶴『*古事記*』の構想と天皇像』（『*日本古代の神話と文学*』塙書房、1998.1

## 参考文献

- 青木周平「*日本書紀の天皇と像と漢文学—顕宗即位前紀を中心に—*」（『*和漢比較文学叢書 第十卷 記紀と漢文学*』汲古書院、1993.9）
- 大久間喜一郎「*応神天皇記の解釈とその伝承*」（『*高岡市万葉歴史館紀要*』6,1996.3）
- 荻原千鶴「*古事記*』の構想と天皇像」（『*日本古代の神話と文学*』塙書房、1998.1）
- 菅野雅雄「*「応神記」海人の涙*」（『*古事記構造の研究*』おうふう、2000.5）
- 田所義行『*儒家思想から見た古事記の研究*』桜楓社、1966.3
- 中野謙一「*顕宗記の物語*」（『*古事記年報*』51,2009.1）
- 長野一雄「*仁徳聖帝記と中国思想*」（『*和漢比較文学叢書 第十卷 記紀と漢文学*』汲古書院、1993.9）
- 矢内啓一郎「*宇遲能和紀郎子の位置*」（『*古代研究*』35,2002.1）

山崎正之「古事記中巻「応神記」考」『古事記・日本書紀論  
集』1989.12  
『古事記(上)(中)(下)』次田真幸校注、講談社学術文庫、  
1977~1984  
『日本書紀(一)~(五)』坂本太郎他校注、岩波文庫、  
1994~1995  
『新釈漢文大系 2 大学 中庸』赤塚忠校注、明治書院、

1978

『新釈漢文大系 4 史記 五 (世家上)』吉田賢抗校注、明  
治書院、1979

『新釈漢文大系 85 孟子』内野熊一郎校注、明治書院、1978

『新釈漢文大系 88 史記 八 (列伝一)』水沢利忠校注、  
明治書院、1990

かわさき みか／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻